

教員の多様性を活かした初年次教育のあり方 —思考を深めるアクティブラーニングに向けて—

井下千以子¹

桜美林大学

A First-Year Experience Taking Advantage of the Diversity of Our Faculty: For Active Learning That Encourages Deep Thinking

Chiiko INOSHITA

J. F. Oberlin University

初年次教育は、2000年代から、その重要性が認識され、急速に普及した。正課科目として教材も多数開発されてきている。一方で、ある程度のサイクルが出来上がると、あとは回していくだけというような形骸化も懸念される。さらに、教授法としてのアクティブラーニングが急速に広まったことで、表層的な外的活動を煽る趨勢も散見されるようになった。こうした初年次教育の現状を教学マネジメントの側面から見ると、飛躍的に普及はしたものの、アドミッションポリシーとカリキュラムポリシーをつなぐ要として、さらにはディプロマシーも見通した役割を十分に果たしているとは言い難い。理念と内実との乖離を直視し、さらなる充実を目指して、再考する段階に入ったと思われる。そこで、本稿では、入口から出口までを見据えた総合的な初年次教育の事例を報告することで、3ポリシーの実質的な運用に向け、初年次教育担当者に限らず、担当外の教員も含めて、組織としていかに連携し、内容を充実させていくか、そのためには何が必要とされるのかを検討することを目的とした。まず、初年次教材開発の事例と、専門科目での探究学習の試みを学士課程カリキュラムに位置づけて、授業レベルでの接続のあり方を検討した。その上で、教員団として高大接続や専門教育との接続を図るには、教員の多様性と専門性を最大限に活用すること、組織として初年次教育を省察して主体的に実践に活かすこと、すなわち、教員にとっても思考を深めるアクティブラーニングが必要であることを指摘した。

〔キーワード：入口から出口まで見据えた初年次教育，探究学習，高大接続，多様性，教員，深い思考，アクティブラーニング〕

1. 初年次教育の普及と現状

DXやグローバル化による社会の急速な変容、さらにはパンデミックや気候変動など、複雑化する困難な問題が山積する現代において、未来を担う人材をいかに輩出し

¹ 桜美林大学 inoshita@obirin.ac.jp

ていくか、大学教育に課せられた責務は大きい。大学にはそうした多様な問題に向き合い、自ら学ぶ主体的かつ自律した学修者を育成することが求められている（中央教育審議会大学分科会，2020）。教学マネジメントを確立し、学修の成果を上げていくため、各大学には、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）、入学者受入れの方針（アドミッションポリシー）の3つのポリシーを策定し、公表することが義務づけられている。

こうした大学教育を取り巻く課題を踏まえたうえで、初年次教育の現状を俯瞰する。まず、初年次教育の普及率は「平成30年度の大学における教育内容等の状況について」（文部科学省，2020）によると、97.4%であり、ほとんどの大学で実施されていることがわかる。また、本学会の貢献もあって、その重要性が認識され、我が国における初年次教育は、正課科目として安定的な立ち位置を確保したともいえよう。

一方で、初年次教育の具体的な内容をみると、レポート・論文の書き方などの文章作法を身につけるためのプログラムでは91.8%、プレゼンテーションやディスカッション等の口頭発表の技法を身につけるためのプログラムは85.3%と、学習スキルの実施率は高い割合を示しているのに対し、メンタルヘルス等、精神的身体的健康の保持に関するプログラムは41.9%、学生生活における時間管理や学習習慣を身につけるためのプログラムは59.5%と、大学生活への移行や適応プログラムの実施率は低く、実施内容に偏りがあることも明らかとなった（文部科学省高等教育局，2020）。

さらに、ここ十数年間に初年次教材が多数開発されたことも普及に拍車をかけた。他方、そうした教育環境の整備に伴い、コース運営において、ある程度のサイクルができてくると、あとは回していくだけというような実質上の形骸化も懸念されている。さらに、教授法としてのアクティブラーニング（AL）が急速に広まったことで、表層的な外的活動を煽る趨勢も散見されるようになった。たとえば、ALの失敗事例として、ALが目的化し、学習目標を伝達しない、段取り不足や、グループワークでの失敗などがあげられ、型に拘泥する事態が危惧されている（中部地域大学グループ・東海Aチーム，2014；亀倉，2016）。

こうした現状を見ると、初年次教育は飛躍的に普及したものの、アドミッションポリシーとカリキュラムポリシーをつなぐ要として、さらにはディプロマポリシーも見通した役割を十分に担えておらず、3ポリシーを踏まえた教学マネジメントが機能しているとは言い難い状況にある。初年次教育の当初の理念「高校から大学への円滑な移行を図るために作られた総合的な教育」（中央教育審議会答申，2008）と内実との乖離を直視し、さらなる充実を目指して、再考する段階に入ったと思われる。

そこで、本稿では、入口から出口までを見据えた総合的な初年次教育の事例を報告したうえで、3ポリシーの実質的な運用に向け、初年次教育担当者に限らず、担当外の教員も含めて、組織としていかに連携し、内容を充実させていくか、そのためには何が必要とされるのかを検討することを目的とする。具体的には、初年次教材開発の理念、初年次以降に学びを接続させていくための専門科目との連関の試み、さらに、多様な教員とその専門性を初年次教育に反映するため、教員にとってのALも必要であることを指摘する。

2. 入口から出口まで見据えた初年次教育

井下(2010, 2013)は、桜美林大学の基盤教育院において初年次支援科目「大学での学びと経験」を、2006年から担当してきた。基盤教育院は学群の増設に伴い2015年に廃止され、基礎教育科目は各学群に任されるようになり、本学のリベラルアーツ学群では共通シラバスと共通教材による初年次セミナー(リベラルアーツセミナー)が開講されている。

教材の選択は教員に任され、ある程度の自由度があることから、筆者は、初年次支援科目「大学での学びと経験」をもとに開発した『思考を鍛える大学の学び入門ー論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで【第2版】』(井下, 2020)を指定テキストとしている。テキストの開発には心理学における学習論と発達論が活かされている。そのねらいは2点にまとめられる。第一は、高校までの知識中心の学習から、「学問の扉」を開き、新しい知の創造の体験をすることで、主体的に考え抜く力を習得させることにある。第二は、大学生活から卒業後までをイメージさせることによって、大学での学びを探究させるアカデミック・キャリアプランニングにある。すなわち、初年次生を対象としたテキストではあるが、入口から出口までを見据え、3ポリシーを踏まえた内容として展開している。

テキストにはワークシートをつけ、ALに必須の「話す・書く・発表する」活動(溝上, 2014)を取り入れ、さらに思考を深めて、メタ認知活動を活性化させるため、ピアレビューと授業外学習を課している(表1)。ワークをおこなうことで、高校生だった自分から、大学を卒業して社会人となる自分までを見通して、大学では何をなすべきかを考え、自らの課題を発見するワークとして疑似体験できるように設計している。

この授業の最終回の学びレポートをみると、初年次セミナーを通して学生が大学4年間の学びをどう捉えようしたかがわかる(表2)。とりわけ、「人として成長できるカリキュ

表1 初年次セミナーの学習項目とねらい

学習項目：全14回()は回数	学習のねらい
自己紹介・他己紹介(1)	自己理解, 他者理解, 信頼関係の構築
学問の扉：学問の世界へようこそ(1)	2008年ブリッジ・カレッジ(入学前教育)に始まった「学問の扉」 大学とは、学問とは何か、問題関心をどう問いに発展させるのかを学ぶ
論証型レポートの基本を学ぶ(6)	データベースによる情報の検索・読解・判断, 批判的検討, 問いを立てる, 内容の構造化, 主張の表現, 発表
アカデミック・プランニング・エッセイ(2)	大学のHPや履修ガイドを調べ、学群の特徴や4年間のカリキュラムを理解し、自分の学びを探究し、プランニングする。【第2版】で加筆した課題
ライフキャリア・デザイン(3)	過去から未来までの自分をアイデンティティステイタスで4分類することで、自分の夢を描き、今後の大学生活での課題を発見する
学びレポート(1)	半期の授業を省察する

表2 授業の振り返り：学びレポート

最終回の振り返り「学びレポート」の抜粋
情報を詳しく調べる大切さ、情報の真偽を見抜く力を学んだ
ブレイクアウトセッションで、自分の意見を納得してもらえた時の嬉しさ、自分とは異なる他人の意見を聞いた時の視野の広がりなど多面的に考えることを学べた
学びのデザインを学んだ。就職のためだけでなく、人として成長できるカリキュラムを組んでいくことが重要だとわかった
これから何をしたらいいのか、どう考えていけばいいかをプランニングすることで夢に現実味が出てきて、将来を考えることがとても楽しみのになった
大学4年間の学びだけではなく将来の自分まで考えなければならないことは難しかったが、それと同時にやりがいや楽しさを感じる事ができた

ラム」を組んでいくことの重要性や、大学での学びと将来をつなげて考えることに難しさを感じつつも、それらのワークにやりがいや楽しさを見出していることから、学生が本授業の目的を明確に理解し、コミットして取り組んでいることが窺えた。

また、本テキスト(井下, 2020)は、2020年5月20日付日本経済新聞に、「コロナ禍の大学—人生のヒントになる書籍」として掲載された。「新型コロナウイルス問題への対策として、大学でオンライン講義が始まっている。学生は自習する機会が増えており、進路や人生を考える手がかりもつかむことができれば問題意識を深められるだろう。学びのヒントとなる書籍を紹介する。学びをより詳しく知りたい場合は『思考を鍛える大学の学び入門第2版』がヒントになるだろう。論文の構成や書き方について具体的なフォーマットを示したページも参考になる」「粘り強く考える体験を」「大学での学びの大切さは自らテーマを見つけ、考え抜いていく点にある」とある。本書は、高校生の探究学習にも活用できるよう設計されており、「学び入門」のねらいが、記事で的確に捉えられたことがわかる。

3. 初年次の学びを接続させるための探究学習を企図した専門科目

では、初年次教育の内容を、その後の専門教育にどう接続していけばよいだろうか。ここでは、初年次教育で実施率が最も高いレポートの書き方を取りあげ、筆者が担当する生涯発達心理学でのレポート課題を事例とし、初年次教育と専門教育との連関を学士課程カリキュラムに位置づけて検討することとする。

図1に、心理学教育におけるライティング指導に関するマップを示した。横軸に知識の広がりとして〈専門性〉と〈一般性〉を、縦軸に知識の質として〈発展的・探究的〉と〈基礎的・定型的〉を表している。初年次教育は基礎的・定型的で一般性が高い教育として第Ⅲ象限に位置し、その対極にある第Ⅰ象限に専門教育がある。専門教育における基礎を効率的に学び、定型的な訓練がなされる教育として第Ⅳ象限に専門基礎教育が、第Ⅱ象限に位置する教養教育では幅広い観点から高度教養教育を提供している。

このマップを用いて、初年次教育と心理学教育の接続を考えてみよう。まず、初年次教育ではレポートの基本的な書き方を学ぶ。2年次になると実験演習レポートの作成法を習得する。教養教育・高度教養教育(enriched major)では、心理学というディシプリンを通して幅広い視野から学んだ知識を自分の言葉で学びを組み立て直すレポートや、専門分野の理解を深めるためのレポートが課される。4年次の卒業論文作成では、自らテーマを設定し、先行研究を批判的に検討して仮説を立て実証し考察することが求められる。した



図1 心理学教育におけるライティング指導

表3 序論の構成要素6点

1. テーマの提示
2. 先行研究の紹介
3. 先行研究の批判的検討
4. 仮説の提示：問いを立てる
5. 目的
6. 方法
引用文献

表4 探究学習のためのライティング・ルーブリック (井下・柴原・小山, 2021)

評価項目	評価の観点	レベル 3	レベル 2	レベル 1	0
探究学習	論点/テーマの提示 課題に基づき、創造的・独創的な論点/テーマを探究し、問題背景に位置づけ説明しているか	課題に基づき、創造的・独創的な論点/テーマを探究し、問題背景に位置づけ、説得的に述べている	課題に沿った、適切な論点/テーマを見出し、問題背景をある程度説明している	論点/テーマらしきものを示しているが、課題の理解は不十分	示していない
	情報の収集・整理・分析 多様な情報を収集・整理・分析する探究のプロセスを経ることで、論点/テーマを導き出し明瞭に示しているか	多くの情報を収集・整理・分析する探究のプロセスを経て、論点/テーマを導き出し、明瞭に述べている	ある程度の情報を収集・整理し、論点/テーマについて述べているが分析力、説得力、具体性に欠ける	情報が多少示されているが、整理されておらず、論点/テーマが導き出せず、説明不十分	示していない
批判的思考	異なる意見の批判 目的を想定し、それとは異なる意見を提示し、批判的に分析しているか	目的を想定し、それとは異なる意見を批判的に検討し、これまで解決されていないことを明確に指摘している	目的を想定し、それとは異なる意見を批判的に検討しようとしているが、問題の指摘が弱い	目的とは異なる意見とはいえ、目的を明確に示している	示していない
	仮説/問いを立てる 異なる意見の問題点を指摘した上で、仮説/問いを導き出し、主張や目的につなげている	問題点を批判的に検討し、論証可能で具体的な仮説/問いを立て主張や目的につなげている	仮説/問いを立てているが、批判的な分析との関連性が不十分で唐突である	仮説/問いらしきものを立てているが、論証は難しい	示していない
論理的表現	論理的整合性 題名、論点/テーマ、目的と方法が、文章全体において首尾一貫し、論理的整合性が取れているか	題名や文章全体が首尾一貫し、論理的整合性が取れ、説得力があり、目的が明瞭である	題名や文章全体の整合性は取れているが、目的と方法との対応関係をより明確化する必要がある	題名や文章全体に一貫性がなく、目的が論理的に説明されていない	示していない
	文章表現・形式 パラグラフライティング、接続・文末表現、文法や引用などのルールが正しい。かつ課題に則った形式で書かれているか	パラグラフライティング、接続・文末表現、文法や引用などのルールは正しく、課題の形式に沿って書かれている	パラグラフライティング、接続・文末表現、文法や引用などのルール、課題の形式は、ほぼ正しいが一部修正すべき点がある	パラグラフライティング、接続・文末表現、文法や引用などのルール、課題の形式は、修正すべき点が多い	示していない

序論の評価は、探究学習 (6 点)、批判的思考 (6 点)、論理的表現 (6 点)、合計 18 点満点で採点する。小項目 [論点/テーマの提示] [情報の収集・整理・分析] [異なる意見の批判] [仮説/問いを立てる] [論理的整合性] [文章表現・形式] は、各 3 点である。

がって、マップの下半分 (第Ⅲ象限と第Ⅳ象限) では基本となる定型的な書き方の指導 (知識叙述型方略による指導: knowledge-telling strategy) が、上半分 (第Ⅱ象限と第Ⅰ象限) では、学んだ知識や調べた資料を批判的に検討し、それらの知識を再構造化して自分の主張を述べるよう、考え抜いて書くことを支える発展的探究的学習を目指した指導 (知識変換型方略による指導: knowledge-transforming strategy) がおこなわれる (井下, 2008)。

図 1 のマップの第Ⅱ象限の教養教育を担うのが、生涯発達心理学の授業である。授業では、学問的に確立された知識を体系的に提示するとともに、日常の場面や社会問題に照らして解説することで、学生が自ら関心を掘り下げ、自分にとって意味のある知識として組み立て直すためのワークとして、レポートの序論の執筆課題を課している。序論課題とは、授業に関連したテーマについて情報を調べて読み込み、批判的に検討をおこない、問いを立てて、目的を明確化する問題解決プロセスに相当する (表 3)。

さて、初年次教育でレポートの書き方を学習していれば、ある程度執筆できるだろうか。現状はうまくいかない。そこで、『思考を鍛えるレポート・論文作成法【第 3 版】』 (井下, 2019) を用いてレポートの序論を執筆させる課題 (表 3) を課し、学生にピアレビューさせ、教員は生涯発達心理学の観点からフィードバックをおこなった (井下・柴原・小山, 2021)。学生が提出した序論課題を、探究学習のためのライティング・ルーブリック (表 4) によって評価したところ、6 つすべての項目において、序論 1 回目から序論 2 回目にかけて評価に有意な上昇がみられた (表 5)。しかしながら、「異なる意見の批判」「仮説／問いを立てる」において改善がみられたものの、評価得点の中央値は 1.5 であることから「批判的思考」を習得したとは言い難く、一科目内の指導のみでは、大きな成果は期待できないこと、反復学習が必要なことが示唆された (柴原・井下・小山, 2021)。

さらに、序論 1 と序論 2 の提出後、ウェブ調査でどの程度難しかったかを 5 件法で問う

表5 ルーブリックによる序論の評価の変化(柴原・井下・小山, 2021)

N=59	序論1		序論2		t-value
	mean	SD	mean	SD	
テーマの提示	1.98	.541	2.14	.571	2.88**
情報収集	1.88	.458	1.98	.541	2.19*
批判	1.39	.588	1.61	.670	4.05***
仮説	1.29	.527	1.39	.616	2.19*
論理	1.54	.536	1.80	.610	4.45***
文章表現	1.88	.646	2.02	.707	2.40*

表6 序論提出後における主観的な難易度の変化(小山・井下・柴原, 2021)

N=56	序論1		序論2		t-value
	mean	SD	mean	SD	
テーマの設定	3.79	.967	3.48	1.112	3.08**
先行研究検索	3.77	1.112	3.52	1.144	2.43*
先行研究批判	4.09	.996	3.77	1.144	3.25**
問いを立てる	4.04	1.026	3.75	1.083	3.60***
研究目的明示	3.80	.980	3.66	1.133	2.06*
研究方法明示	4.02	.904	3.88	.974	1.93
引用明示	3.20	1.151	2.98	1.228	2.36*
適切な題名	3.86	1.034	3.63	1.088	3.45**
自分の言葉	3.77	1.112	3.57	1.110	2.39*
論理的説明	4.04	.903	3.95	.999	1.23

表7 序論提出後の学生による自由記述による振り返り

肯定的意見
「どのデータであれば自分の論を支えられるか」などメタ認知的にもう一人の自分として考えた
問いを立て、批判的な視点も取り入れてみることでより内容を理解することができることがわかった 他の授業や、物事を考えるときに利用できると思う
自分で資料を調べて書く、試行錯誤しながら考えるプロセスは社会人になっても必要で、良い経験だった
大学4年間通っていたにもかかわらず、レポートの正しい書き方をわかっていなかった 論文や新聞などデータベースも初めて利用した
1年生からこの授業を受けていれば、留年しなかったのではないかとまで思った
否定的意見
あまり意味があると思えなかった
最初は、なぜ心理学の授業で?と思った

たところ、序論1と序論2の比較において、ほとんどの項目で有意差がみられ、難しさの程度が低下していた(表6)。このことは、テキストによる学習の効果に加え、学生同士のピアレビューや教員によるフィードバックが有効であったと考えられる。一方で、序論2において「引用明示」を除いては、中央値である3を超えており、難しいとする認識はある程度は緩和されたものの、それでも総じて「容易でない」と捉えていることは、すなわち、序論課題は学生にとって「学ぶ意味」があったとも解釈できる(小山・井下・柴原, 2021)。

また、学生の自由記述による振り返りには「大学4年間通っていたにもかかわらず、レポートの正しい書き方をわかっていなかった。論文や新聞などのデータベースも初めて利用した。1年生からこの授業を受けていれば、留年しなかったのではないかとまで思った。」と記されており、テキストを活用した授業外学修を徹底させ、序論課題を課すことで、初年次では定着しなかった力がつき、専門教育での学びを探究するための思考の鍛錬や、情報の判断力の育成につながったと思われる。

探究学習・思考力・表現力育成の観点から、心理学のカリキュラムをみると、序論課題の試みは心理学の講義を自分にとって意味があるように再構造化する学習経験であったことがわかる。すなわち、レポートの書き方は初年次で学習すれば習得されるものではなく、多様な授業を通して幅広い知識を学ぶ中で、活用できる知識やスキルとして鍛えられるのではないか。こうした知見は、探究学習に取り組んでいる中高一貫校を対象とし、高校卒業時と大学1年修了時に実施した調査(井下・柴原, 2021)からも明らかにされている。

4. 多様な教員を初年次教育へと動機づける—アクティブラーニング再考

ここまで、授業とカリキュラムレベルでの試みをみてきた。おわりに、組織レベルでの改革として、教員団(Faculty)をいかに初年次教育へと動機づけ、初年次後の教育へいかに接続させていくか、教授法としてのALを再考し、検討する。

第一は、初年次教育担当教員の認識についてである。初年次で培ってきた力を2年次以降に継続して指導していくためには、初年次生を主として担当している教員であっても、大学4年間の学生の成長や学びの様相を射程に入れたコースデザインや授業内容の吟味が必要だと思われる。また、初年次セミナーを担当している教員であっても、他の初年次科目まで十分に把握しきれていないこともあり、学生が初年次教育を通して、何をどう履修し、どのような力をつけたのかをFDなどで総合的に分析し把握する必要があるだろう。

第二は、何を目標とし、いかに学びを接続するかについてである。第3節で報告した生涯発達心理学の履修生の振り返りには、レポートの書き方について「初年次でやったかもしれないが覚えていない」あるいは「初めて学んだ」という回答が多数あり、初年次で履修していても、専門科目で使えるとは限らないことがわかった。レポートの書き方を学んだ経験があっても、なぜ大学でレポートの書き方が必要なのか、なぜ引用は必要なのか、どのような課題に対してどう使いこなすことができるのかを、教員が、学生に主体的能動的に考えさせる指導をしていないとすれば、学生は授業後も使える知識として学べないのではないか。たとえば、本稿の第2節では、学生の状況を見極め、教員が教材をカスタマイズし、主体的に考えさせる工夫を事例として示してきた。また、第3節では、教員の専門性や多様性を活かし、初年次教育以外の授業でも、2年次以降も、初年次の学びを定着かつ探究させることを企図した事例として、生涯発達心理学における序論課題を取りあげた。こうした方策を多様な授業で継続的におこなうことが必要だと思われる。

第三は、教授法としてのALを再考する必要性についてである。授業でワークをおこなっても、すなわち〈外的活動における能動性〉が働いていても「主体的に考え、思考を深める」ことにつながっていない場合もある。それに対し、〈内的活動における能動性〉は、〈外的活動における能動性〉のようにワークの実施に力点を置くのではなく、学生自身が自分の頭でどう考えたか、どのくらい何を考えたかなど、じっくり考えさせることが重要となる。たとえ、講義型の授業であっても、学生の思考や感性を揺さぶり、深く考えさせることができるのであれば、その授業は十分にアクティブだといえよう(井下, 2016)。

本稿では、教員個人の工夫や努力に加え、組織として多様な背景をもつ教員団の関心をいかに初年次教育へと向け、動機づけていくか、その必要性と可能性を示してきた。組織には、初年次教育に熱心な教員も、専門教育に力を入れている教員もあり、教員の関心やエフォートは様々である。多様性を認め合い、互いの立ち位置を理解し、リスペクトする

ことが、教員の専門性や個性を活かすこととなり、学生の学びを豊かにすることができるのではないか。教員団で「どのような初年次教育が、なぜ必要か」「初年次での学びをその後の教育にいかに接続していくか」を共に思考し学びあい、それらを発信する、その先に初年次教育のさらなる進化があると考え。教員自身が初年次教育を主体的に捉え、理解していくためには、教員にとっても思考を深める AL が必要であろう。

注

本研究は、科研費 18K021713「高大接続に資する思考力・判断力・表現力育成のための国際連携研究」、大学教育学会課題研究 2018-2020 年度「学生の思考を鍛えるライティング教育の課題と展望」の成果の一部である。

参考文献

- 中部地域大学グループ・東海 A チーム (2014)『アクティブラーニング失敗事例ハンドブック—産業界ニーズ事業・成果報告—』一粒書房
- 中央教育審議会 (2008)『学士課程教育の構築に向けて (答申)』
- 中央教育審議会大学分科会 (2020)『教学マネジメント指針』
- 井下千以子 (2008)『大学における書く力考える力—認知心理学の知見をもとに—』東信堂
- 井下千以子 (2010)「大学での礎を築く—アカデミックキャリアガイダンス科目「大学での学びと経験」と「ブリッジカレッジ」—」『Obirin today』, 11-41.
- 井下千以子 (2013)「思考し表現する力を育む学士課程カリキュラムの構築—Writing Across the Curriculum を目指して—」関西地区 FD 連絡協議会・京都大学高等教育研究開発推進センター (編)『思考し表現する学生を育てる—ライティング指導のヒント』ミネルヴァ書房, pp.10-30.
- 井下千以子 (2016)「思考を深めるアカデミック・ライティング—アクティブラーニングの効用と課題—」『IDE 現代の高等教育』, 582, 21-25.
- 井下千以子 (2019)『思考を鍛えるレポート・論文作成法【第 3 版】』慶應義塾大学出版会.
- 井下千以子 (2020)『思考を鍛える大学の学び入門—論理的な考え方・書き方からキャリアデザインまで—(第 2 版)』慶應義塾大学出版会
- 井下千以子・柴原宜幸 (2021)「論述課題と指導内容に関する高大接続の観点からの検討—中高一貫校の事例をもとに—」『大学教育学会誌』, 43 (1), 23-27.
- 井下千以子・柴原宜幸・小山 治 (2021)「探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果—問題と目的—」『大学教育学会誌』, 43 (1), 28-32.
- 亀倉正彦 (2016)『失敗事例から学ぶ大学でのアクティブラーニング』東信堂
- 小山 治・井下千以子・柴原宜幸 (2021)「探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果—ウェブ調査による学習意識・行動を踏まえた相関分析—」『大学教育学会第 43 回大会要旨集録』, 74-75.
- 溝上慎一 (2014)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 文部科学省高等教育局 (2020)『平成 30 年度の大学における教育内容等の状況について』
- 日本経済新聞 (2020)『コロナ禍の大学—人生のヒントになる書籍—』2020 年 5 月 20 日付.
- 柴原宜幸・井下千以子・小山 治 (2021)「探究学習を企図した専門科目でのレポート指導が批判的思考力・論理的表現力に及ぼす効果—ライティング・ループリックに基づく評価とその変化—」『大学教育学会第 43 回大会要旨集録』, 72-73.